

白川静博士(1910～2006年)は、中国古代の甲骨文や金文まで遡って、漢字の原義を字形学的に体系化した白川文字学を確立した。漢字は象形文字の時代から今日まで実用されている唯一の文字であり、文字誕生以前から誕生以降をつらね、人間の意識、身体や自然の捉え方、文化の変遷を解明するために、認知考古学的に多大な意味があると示唆されている。身体の形・動きや感覚に根ざした漢字の成り立ちを理解することによって、文字を機械的に暗記するのではなく、個々の文字を堅固に学ぶ事が可能になると期待される。白川氏の故郷である福井県の教育委員会は、児童が興味・関心をもって漢字学習に取り組めるようにすることを狙いとし、白川文字学を活用して独自の教材を作り、2008年4月から県内の公立小学校と特別支援学校で使い始めた。教材では漢字の成り立ちについて分かりやすい説明を掲載しており、形・意味の面から体系的に学べるように工夫している。

トピックス 4 身体性や感覚に根ざした漢字の成り立ちを活用する学習教材

福井出身の文字・漢字学者、白川静博士(1910～2006年)は、中国古代の甲骨文や金文まで遡って、漢字の原義を字形学的に体系化した白川文字学を打ち立てた。氏の研究方法は、字形のみならず、古代人の意識、生活、文化、自然観も考慮に入れて解析するものであった。又、実際に甲骨文字を彫った古代人の身体感を実感するために、数万片の古代文字資料を、自らなぞって記録した。

3千～5千年前に誕生した古代文字の多くは、象形文字とそれに基づいて音節化した文字から成るが、実用文字として現存するのは漢字のみである。漢字は、文字誕生以前から誕生以降をつらね、人間の意識、身体や自然の捉え方、文化の変遷を解明するために、認知考古学的に多大な意味があると示唆されている。

個人の成長過程をみると、小学校の学年が上がるにつれて、漢字の形の複雑さ、読みの多様性、意味の多義性、抽象性が高まり、高学年では機械的に漢字を暗記することが容易ではなくなる。特に、読み書きの学習困難のある児童にとっては、低学年から急速に難易度が上がる。

これに対し、複数の感覚を動員した多感覚学習法が有用であるが、これまで、音節文字であるアルファベットやひらがなでは、単語の意味に依存して、その中で使われる文字を習得する方法がとられてきた。一方、漢字は、字形や成り立ちからみて、様々な感覚や身体などの具体的な手がかりを含むため、これを活用して現実に接地した堅固な学習が、個々の文字単位で可能になることが期待される。

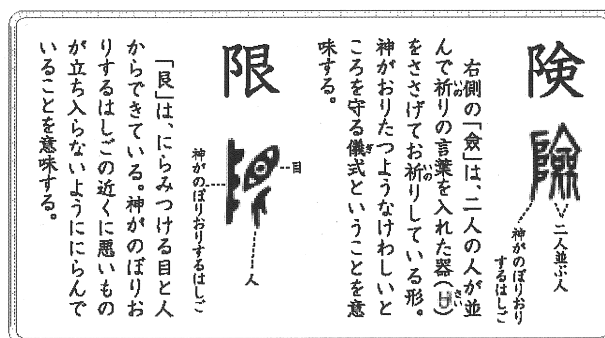
福井県教育委員会は、児童が興味・関心をもって漢字学習に取り組めるようにすることを狙いとし、白川

文字学を活用して、独自の教材を作り、2008年4月から県内の公立小学校と特別支援学校で使い始めた。

教材は①なぞり書きもできる書き込み式の練習帳、ワークシート「楽しい漢字」、②活用の手引き、③壁などに掲示できる漢字一覧表からなる。目や耳、手足、身体、動作、動植物、地形、道具、等、漢字の成り立ちについて分かりやすい説明を掲載している(図表参照)。

学習指導要領の学年別漢字配当表(1006字)を基準にしたうえで、異なった学年で学ぶ事になっている漢字も、形や意味の類似している仲間の漢字を集めて、体系的に学ぶよう工夫している。又、福井県での日常生活で接する事の多い漢字(16字)も配当表外から加えている。

漢字の成り立ちの説明



漢字学習ワークシート「楽しい漢字」5年生用から引用。象形的字形の組み合わせから、「限る」・「険しい」など抽象的意味を表す文字をつくっている。又、宗教的・呪術的背景のあることがわかる。白川氏は、「口」を持つ漢字の多くは、「口」を「くち」ではなく、神に祝詞をささげる器(図中の「さい」と解釈することによって意味が明らかになる事を見出し、これを発端に多くの漢字の成り立ちを解明した。

参 考

- 1) 福井県教育委員会、『漢字学習ワークシート「楽しい漢字」、活用の手引き、白川静博士の漢字の世界へ』
- 2) 白川静、「漢字一い立ちとその背景」、岩波新書(1970)
- 3) 立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所：<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/sio/eprof.html>